

剣は語る



4匹の龍を描いた大刀（湯舟坂2号墳）
京都府立丹後郷土資料館提供

刀を握る柄頭えがしらの部分に飾りを付けたものがあります。弥生時代後期の墓である京丹後市三坂神社墳墓みさかじんじやでは輪っかの形をした中国製の素環頭大刀そかんとうたちが出土しています。本来は武器として使用していたのかもしれませんが、飾りの付いた刀の多くは権威を象徴する道具として使用されたようです。

古墳時代後期、京丹後市湯舟坂2号墳では輪っかの中にデフォルメされた4匹の龍が描かれています。4匹の龍はそれぞれ2匹の龍がひとつの宝玉くわを銜えたように描かれています。

湯舟坂2号墳の環頭大刀かんとうたちを平板化し、さらに省略したのが京丹後市丹後町高山12号墳の環頭大刀たかやまになります。

環頭大刀も素環頭大刀と同じように、実用のものではなく、権威の象徴として古墳に葬られた人とともに棺に納められています。装飾を施し、鍍金めっきで飾った刀を誰もが作れるわけではありません。そのため、軍団の長として任せられた者が、ヤマト政権から拝領した大刀とも考えられています。

大刀の本体（刃の部分）は木質の鞘さやに収められていますが、長い年月の間に鞘本体が腐食してなくなってしまいます。この鞘にどのように収めていたのか想像しにくいものに、剣身が波をうったように蛇行する蛇行剣だこうけんがあります。現在、京都府内では綾部市奥大石2おくおおいし

号墳と南丹市城谷口2号墳じょうだにぐちから出土しています。

奥大石2号墳から出土した古墳時代中期（5世紀）の蛇行剣は、関東から九州北部の小古墳を中心に約30振確認されています。各地域の首長墳からはほとんど出土していません。この時期の蛇行剣は、緩やかに2か所で蛇行し、全長が70cm前後のものが多いことから、一元的に生産・分配された可能性があります。一方、城谷口2号墳から出土した古墳時代後期（6世紀）の蛇行剣は、九州南部の古墳や地下式横穴墓を中心に約30振出土しています。この時期の蛇行剣は、長さ・蛇行回数・形状が一定しないことから一元的な生産ではなかったと考えられます。出土数が全国的に少ないことから権威を象徴する道具立てであったと考えられますが、時代毎に分布域が変化することや各地域の首長墳からほとんど出土しないことから、甲冑かっちゅうなどと比べると拝領するランクとしては下位に位置付けるべきものと考えられます。

古代中国の「蛇龍」には自然を司るという概念が認められます。その蛇龍も自由に操れる中国の農耕神「雨師妾ウシシヨウ」などの能力が中国皇帝には不可欠であったと思われます。大陸交渉が盛んになる古墳時代中期にその概念が大陸から伝わり、蛇に見立てた蛇行剣が作られたと考えています。畿内政権下での各地域の首長は、農耕司祭者から武人へと急速に変化しますが、小地域の首長は、依然として司祭者的な性格が強かったため呪術的な蛇行剣を必要としたのではないのでしょうか。

（小池 寛）



剣身が波打った蛇行剣

（左：奥大石2号墳、右：城谷口2号墳）